

永瀬清子の老い

——日々を新しく生きる——

綾目 広治

一

老年期を現在の一般的な基準に従って、仮に六五歳以上とする
と、略年譜などから窺われる、老年期の永瀬清子すなわち六五歳以
降の永瀬清子の活躍には、眼を瞠るものがある。実に精力的に活
動をしているのである。『海は陸へと』(思潮社、一九七二(昭和
四七)・九)や『あけがたにくる人よ』(思潮社、一九八七(昭和
六二)・六)の詩集および『私は地球』(沖積社、一九八三(昭和
五八)・一)などの選詩集の出版、また『短章集』(思潮社)と名づ
けられた、散文詩とエッセイとの両方の性格をもっているような文
集を四冊刊行、さらには『かく逢った』(編集工房ノア、一九八一(昭
和五六)・一二)などのエッセイ集を出版して創作活動を活発に展
開するとともに、岡山女性史研究会の会長を務めたり、一九八八(昭
和六三)年には岡山での世界連邦婦人の会開催に参画し、各地で講
演を行うなど、社会的な活動も広く行っている。一九九三(平成五
年)に白内障などの眼の手術をしてからは、さすがに活動は縮小され
たが、それでも永瀬清子は一九九五(平成七)年二月に脳梗塞で
八九歳の生涯を閉じるその前年まで、たとえば毎日新聞連載「日々

のつばやき」を月に一回書いていた。

このような活動ぶりを見ると、井久保伊登子氏が著書『女性史の
中の永瀬清子(戦後篇)』(ドメス出版、二〇〇九(平成二一)・一)
で老年期の永瀬清子について、「それにしても、稔り豊かな清子の
老いの日々だった」、あるいは「何とも豊潤な七十代後半である」
と述べているのも、たしかに頷ける。それでは、どうして永瀬清子
は晩年になっても、あのようにエネルギーに活動することがで
きたのであろうか。ここでは、その謎を少しだけ解き明かしてみた
い。また、これまで永瀬清子における老いの問題について主題的に
考察した論考はないから、その謎を解き明かそうと試みるのは、意
味のあることと思われる。

さて、もちろん永瀬清子に超人的な体力や精神力、そして生命力
があったとは考えられない。もっとも、詩人としての才能や人とし
ての聡明さ、さらには人としての意志の強さを持っていたことは確
かであろう。しかしだからと言って、それらのことは晩年期の旺盛
な活動と直ぐには結びつくものではない。先走って予想を述べると、
おそらく人生や老いに対する彼女の姿勢に、その謎を解く鍵がある
のではないかと思われる。とは言え、老年期に入ってから永瀬清

子にも、私たちが普通に抱く、老いに対しての思いもあったようである。まず、そのことから見ていきたい。

『流れる髪 短章集2』（思潮社、一九七七〈昭和五二〉・二）の「父の手紙」には、田舎の実家に帰って倉を整理していると、父から母への古い手紙や葉書が入っており、それらは永瀬清子が生まれた頃のものであったこと、その中には妊娠中の母に対して「心をおだやかに美しくお持ち下されたく候」という、母を気遣う父の言葉があり、また清子が生まれてからは「体重をおしらせ下さい」という言葉もあったことが語られている。その時の父は二五歳、母は二〇歳であったが、父が「心をおだやかに」と「祈ってくれた」ことについて、永瀬清子はこう語っている、「もしこの祈りがなかったら、私はどのように荒々しい人間になっていた事かしれないのだ——。」と。

これを書いたのは永瀬清子が七〇歳のときだと思われるが、もちろんそれまでの永瀬清子も、自分の人生が多くの人に支えられたものであることは、十分承知していたであろう。しかし、さらに自分の知らないところで、自分の人生は誰か（この場合は手紙の父）に見守られていたということを、改めて認識し実感したわけである。おそらくこういうことは、年を重ねると私たちにも体験されることであろう。また、エッセイ集『うぐいすの招き 日々の紀行』（れんが書房新社、一九八三〈昭和五八〉・一一）に収められた、六九歳ときに書かれた「幸と不幸の境界——みつめる人ありて——」には、「あともう少ない手持時間に私はどれだけの事が出来るか、その努力はすべての不幸を幸福にかえるすべでもであろう。なぜならば幽かであっても私には亡き父母が、又わずかながら友が、いずこかにいてみつめていると信じられるから。私はその人々にみられるた

めに最後の努力をつくすほかないのだ。」と語っている。

こういう感慨も、年を取ったという自覚のある人ならば、普通にあるのではないかと思われる。「手持時間」の少なさについては、まさにそうであろうし、やはり死者に見られているという感覚は、若いときよりも年を取ってからの方が強くなるものだと思われる。死者の「友」に関しては、七四歳のときの『焔に薪を 短章集3』（思潮社、一九八〇〈昭和五五〉・一一）の短章「ひとりである事をよしとしている時」では、「雨が降って来てくれた。／遠い遠い空から／すると友だちが来てくれた。／むかしむかし死んだ友だちが——。」と語られている。年を重ねれば重ねるほど、自分に関係のある死者の数が増え、たとえば一人のときにふとそれらの死者のことを思い出して、彼らと架空の対話をしたり、あるいは対話したような気になるということは、私たちにも普通にあるであろう。また、『流れる髪 短章集2』の中の、「老」と題された短章には、「自分にやさしくする事を自分にゆるす。／それが老だ。」と語られている。このことは人によりけりであろうが、おそらく多くの人は年を取ってもなお、〈自分に厳しくあらねばならぬ〉とは思わないであろう。やはり、「自分にやさしくする事」を許すと思われる。

七七歳のときに刊行された『彩りの雲 短章集4』（思潮社、一九八四〈昭和五九〉・二）には「昔、女があつた」という文から始まる短章で構成された「第四章 にせ物語」という章があるが、その中に「c 鉛玉」という短章があつて、そこにはやはり年齢を重ねることで分かる事柄があることが語られている。生前の夫が朝食の後にいつも「おい鉛玉！」と言うのを、永瀬清子は「はなはだ馬鹿らしく思っていた」が、ところが自分が老いて苦い散薬を飲むよ

うになってからは、「にがい散葉が口の中に残るのでひとりでに館玉がほしくなった」らしいのである。そのとき、永瀬清子は「夫もそうだったのか」と思い、「それで生前の夫をやさしく理解することに欠けていた事にはじめて気づいた」ようなのである。瓶の中の館玉を見ながら、こう語っている、「瓶の中のセロハンに包まれたコハク色の粒／それはさびしい私の悔いのこころ」と。このような「悔い」の体験は、私たちにもあることであろう。

このように年を取ってから往事を振り返って、「悔い」を新たに実感するということでは、たとえば詩集『あけがたにくる人よ』に収められた詩「若さ かなしさ」で語られている事柄もそうである。東京にいた当時の永瀬清子より「ずっと年上」の「学識あるちゃんとした物判りのいい紳士」から電話があり、どうも彼は永瀬清子に会いたかったようなのだが、「病氣」のためにどうしても会えないことを言ったようである。しかしそのときの永瀬清子は、「長く長く電話で話す彼に当惑さえしていた」ようで、慰めの言葉も言わず、「人間ってそんなものよ」とか、「病氣ってそんなものよ」と言っらしい。彼は慰めてもらいたかったようなのに、である。当時の永瀬清子は、そのことに心を向けることをしなかったのである。永瀬清子は詩の最後で次のように語っている。

私はああ、恐ろしいほどのつめたさ
若さ、思いやりのなさ

そそり立つ岩さながら――

私を遠くからいつもみつめていたそのさびしい瞳に
それきりおお 私は二度と会うことはなかったのだ

おそらく、年齢を重ねるほどに、この種の「悔い」の思いは強いものになって来るであろう。そういうことは、年を取ることの一面にたしかにあるわけだが、永瀬清子もそれをしたたかに味わったのである。やはり短章集『彩りの雲』の短章「ヒルムカシ」には、次のように語られている。

今、年は傾き、命も底をついて来たから、今こそ、自分の望むことをやろうと思ひ、いろいろな禁忌を破りハメをはずし、若い人々に現実の仕事をまかせ、今まで出来なかつた事をやりとげたいと願うのである。霊よ、もう私をせめず、命を好きに使わせておくれ、私の時間はもうきつと夜に入っているのだから。こういう思いも、ある程度年齢を重ねたなら、多くの人が持つのではないかと思われる。ただ、人によつては、なかなか「若い人々に現実の仕事をまかせ」という心境にならず、いつまでも現役の働き手でありたいと思つている高齢者も少なからずあるようだ。とりわけ、企業のトップとか、政治家にそういうタイプの人が多いようである。実は、彼らの多くは単に老害を撒き散らしているだけのようなのだが。

そのことはともかく、こうして永瀬清子のエッセイなどを見てみると、私たちの多くが老いの意識から持つだろう思いを、老年期に入った永瀬清子もやはり同様に持つていたことを知ることができ。自分の時間が「もうきつと夜にはいつている」という思いは、詩においても語られている。永瀬清子は一九九五年二月に逝去したが、逝去後の同年四月に刊行された詩集『春になればうぐいすと同じに』(思潮社)に収められた五連構成の詩「走り去るわが時間」には、永瀬清子の詩に曲を付けてくれた若い作曲家のことを思つて第二連

の最後で、「遠い都会へあなたは去らねばならぬ」と述べた後、第三連で次のように語っている。続けて、第四連は省略して第五連を引用する。

彼は若々しくほほえみ手をとって

「またゆつくりお会いしたいのですが」と云う

嘘云わぬ人のまじめさを私は思い

心はどんなにか楽しくときめくが

「もし機会がありましたら——」とだけ

心は老いた山羊のようにうなだれる

私に「時間」は 一層無慈悲に奔り去り

若い人と決して同じ速度ではないから——

おお若人にあすの約束はできよう

それでも現身の私にはそれができない

走り去るわが「時間」はつかのま

美しい音符は紙の上に止まっても——

わが詩はやさしくそこにはばたいていても (ルビ・傍点は原文、以下・同)

この詩からは、やはり永瀬清子も、「時間」が「無慈悲に奔り去」ってしまふことの悲痛さを、私たちと同じように感じ取っていたことがよく伝わってくる。その「時間」の経過は、あの「グレンデルの母親」の上にも流れているとされている。詩集『あけがたにくる人よ』(思潮社、一九八七(昭和六二・六)に収められている詩「老いたるわが鬼女」にそのことが語られている。「グレンデルの母親」は「私の洞」に棲んでいて、今は「みやびなく華やかさなく」という状態であり、

次のように続けられている。「磨いでいるのはただ我執の牙、／銅色の髪はすでに枯色／眼のみ赤らみ皺に埋れんとして／なおまだ思っている若き日日の自由」、そして最終連でも「満天の星の下、わが洞になおいささかの霜をさけて／昔のよき日の夢をあたためる(略)」と。

詩「グレンデルの母親」は、その題名が永瀬清子の第一詩集『グレンデルの母親』(歌人房、一九三〇(昭和五・三)にも採られていることからわかるように、永瀬清子の初期の第一の代表作と言っているが、「グレンデルの母親」も寄る年波には勝てないかのように語られ、わずかに「昔のよき日」や「若き日日の自由」を回想することによって自らを慰めているかのようである。そのように永瀬清子は語っているのである。この詩には、老いの悲哀が出ていると言えよう。とくに「我執の牙」を「磨いでいる」というのが、憐れである。このようなことも、老年になった永瀬清子の思いでもあることは間違いないであろう。そして、それはまた私たちの多くと共通するものである。

しかしながら、永瀬清子が優れた詩人であるのは、老いの問題に對して、そこに止まっていないことである。永瀬清子は、老いから来る悲哀の思いを抱きつつも、老いそのものから眼を背けず、老いそのままに受け止め、さらにそれを踏まえて積極的な姿勢で老いの人生を生きていったのだと思われる。次に、それについて見ていく。

二

詩「老いるとはロマンチックなことなのか」(『あけがたにくる人よ』所収)の一部を次に見てみたい。

老いるとはロマンチックなことなのか
もうあと僅かなので

心はいそぐ朝も夕も
崖つぶちの細道をゆくように

おおいまはじめてわかる われらがスリリングないのち

(略)

けさ、朝餉の汁の実に葱を摘もうとした時

指はつめたくまだ霜にふれたけれど

それでも太陽光線は青くみなぎりわたり

眼もあけられず私は思わず

春の方へとぶつ倒れた

この詩は、「老いるとはロマンチックなことなのか」という問い掛けから始まっているが、その問い掛けに対して詩の中で明確な答は言われていない。しかしながら、「崖つぶちの細道をゆくように」とあり、そのような自分の「いのち」、つまりは人生が、「スリリング」なものなのだ、と老いて「いまはじめてわかる」と詩人は言っている。「スリリング」とは〈ドキドキ、ワクワク〉することであるから、これは「ロマンチック」の意味合いにも繋がるだろう。老いた「いまはじめてわかる」、自分の人生はそういうものだったなのだ、と。そのことを分かせてくれた「古い」は、やはり「ロマンチックなこと」ではないだろうか。そのように、詩の全体で先の問い掛けに答えていると言える。

このテーマと重なることを語った短章「老いたる友」が『流れる髪 短章集2』（前掲）に収められている。この短章は、「年をとっ

たら、永瀬さん、すこし物が見えるようになったと思わない？」と語りかける、七四歳の友人との会話から成り立っている短章であるが、この友人の問い掛けに対して永瀬清子も同意しながら、こう語っている。すなわち、「今まで平凡すぎるくらい平凡ならしを私はして来たと思っていたのに、今になってみるとどの一隅をとってみても胸せまる事の連続だったのです。それが私に見えて、来たという事の意味だと思うの」と。たしかにそうであろう。多くの人は自分の人生を平凡な人生だと思っているであろうが、その辿ってきた人生の道のりを、よく見るならば実に起伏に富んでいて、それらは良く言えば「ロマンチック」であろうし、したがって少々「スリリング」でもあるだろう。しかしながら、不遜な私たちは高を括って、その起伏を言わば平^ならして、「自分の人生は「平凡」だ」と判断してしまうわけである。

だから、「老いる」ことそのこと自体が「ロマンチック」だということも含みながら、「古い」は人生の「ロマンチック」な面に思い至らせてくれるものであり、したがってつまるところ、そういう「古い」は「ロマンチック」なのだ、ということでもあろう。この詩でさらに注意したいのは、最終連で「指はつめたく」て「霜」もあるのだけれど、「太陽光線」のことが語られていて、そして「私」は「春の方へとぶつ倒れた」と語られていることである。この最後の言葉は、人生に対しての詩人の積極的な姿勢を語った詩句と言える。「古い」でも自分は「春の方へと」向かうのだ、という決意表明のように捉えることもできる。

では、永瀬清子は「古い」や「老いる」ということについてどう考えていたのであろうか。『焔に薪を 短章集3』（前掲）には短章

「老（一）」には次のように語られている。

老いたのは確かであるが「老人」になったとは思いたくない。

私として老いたのであり、「老人」になったのとはちがう。

私が恋したのであっても「恋をしたのではないと同じに——」。

これは、人を「老人」という一般的な類型の中に押し込めて、その人のことを分かった気にならないで欲しい、それぞれの人がそれぞれに老いたのであって、類型的な枠組みで受け止めないで欲しい、ということを行っているのである。しかし他方で、老人たちに対しては、「老（二）」では、最初に「人は皺よった自分の顔は意識していない。／曲がった自分の手足の上にも、若い時のままの顔を描いている。」と述べ、最後に「いつも昔の歌がきこえていて／今の音楽は耳に入らない。／それがみんなの罹る症状だ。」と語っている。この「老（二）」では、自らの「老い」を受けとめず、若かった「昔」にしがみついて、自分の今を受容しない「老い」た人たちを批判しているのである。若かった昔に執着するのではなく、「老い」た自分をまず素直に受け容れるべきである、と。

このことはまた、「老い」を肯定的に受け止めようとすることに繋がる。永瀬清子八四歳直前の詩集『卑弥呼よ 卑弥呼』（手帖社、一九九〇〈平成二二・一〉）に収録の詩「わが老人の日」では、娘さんたちが花束を贈呈して「老いたる私」を慰めてくれるので、その慰めを受け容れようとしていること、そして「慰めたり慰められたり」することが「人生の本当の花なんだろうよ」ということが語られた後、月が二個に見えると言われ、「そうだ、乱視がすすみ白内障も加わって／本が読みにくいとはこのごろ思っていたが／月が二個あるなんてはじめて気づいた」として、詩は次のように結ばれている。

おお、ほんとは

悪いことじゃあないよね

そうだ、あの花束もきつと二倍に見えていたんだ。

そして彼女らの慰めもきつと二倍に——

おそらく「老い」と共に進行したと思われる「乱視」「白内障」さえも、言うならば敢えて肯定的に捉えていこうというのである。二つに見えることは二倍に見えることで、「花束」も「慰め」も二倍あると思えばいいのだ、と。肯定的ということの中には、もちろん「老い」の現実をしつかりと受け止めた上でということが含まれているわけで、永瀬清子は、さらには「老い」ている自分をユーモラスに語ることもしている。次の引用は『彩りの雲 短章集4』（前掲）の中の短章「d 老いたる女詩人」である。

もう私には朗読はできませんよ。何てったってそりゃ真正面むいて朗読する時はよござんすよ。声はまだまだ透るしね。問題は、いざ楽屋の方へ退く時だいなしになる事なんです。

つまり横向きの姿で全部ぶちこわしになるんですよ。それがね、あなた、情けないことに疑問符そつくりの恰好なんですから。この『短章集』は永瀬清子が七八歳になる直前に刊行されている。永瀬清子は、年老いた自らの横向きの姿を「疑問符そつくりの恰好」だと言っているのである。これには少々自嘲的なニュアンスも無くはないが、それよりもやはり自らの「老い」をそのままに受け止め、そしてそれをユーモラスに語っていることに眼を向けるべきであろう。このことは、それまでの自分の人生を受け入れようとするということでもあろう。

没後の詩集『春になればうぐいすと同じに』（思潮社、一九九五

〔平成七〕・四に収められた詩「私らとうぐいす」では、九十歳になる「杜実さん」を見舞ったとき、彼女が「輪挿しの「れんぎょう」を写生していたことを語った後、杜実さんや自分はずまづきながら「八十年九十年を生き」、思い出を語りつつ、「今も辿るのか自分の道を――。」と述べた後、「次第に夕暮れが降りてきた／ありがとうよと私はそのれんぎょうの絵を貰って帰るわ／夕ぐれのこの世の道を――。／クレヨンが黄色がその時あたたかい灯のように／わたしの胸にともっているわ」と結ばれている。この引用の後半部分では、詩人は、老年になってそれまでの人生を振り返り、それなりに満足している、小さな悔いはたくさんあるであろうが、しかし自らの人生全体については、「これで良かったのだ」と肯定していると見えよう。「今も辿るのか自分の道を――。」という言葉にそれを見ることができる。

しかしそれは、自足してそこに止まることとは違っているのである。『焔に薪を 短章集3』の短章「c 八十才を過ぎた友人のこ」とは、「改まらぬ心や性質を死ぬまで日も足らず改めようとする、その人こそいつまでも若い人なのではなからうか。／老人が「趣味に生きる」などと云うのは、むしろいやらしいことばではないのだろうか。」と語られている。これは、死ぬ直前まで前を向き、自分の中に改めるべきことがあるなら、改めようとする積極的な姿勢である。〈老いたからもう面倒なことはいいのだ〉という後ろ向き姿勢ではなく、また〈老いた人間は自足するべきである〉という、変に生悟りの態度でもない。老いを認めつつも、だからと言って老いをことさら主張して、何もやらないことの口実とするのではなく、老いたあり方でこの人生を前向きに生ききって行こうとする

わけである。

亡くなった「港野喜代子の魂に」という副題のある詩「夜ふけて風呂に」(「あけがたにくる人よ」所収)では、「私もやがては行くだろうよ／でも今日は何とかふるい立って／湯船の湯をいまト掻き！／私はしぶきをとばしながら／この四角な棺桶型の／湯舟の枠をまたぎ出る／現世の方へと――。」という詩句の後、次のように語られている。

私は現世の大タオルで

ぱつと自らのしずくを抱きとろう

今ひと息 この世ではばたくため

仮の大きな翼に包まれるようにと

生きている限りは、自分の姿勢を死の方に傾かせるのではなく、「現世の方へと」、「この世」の方に向かって「はばた」かせようとするのである。好々爺という言葉があつて、これは人の好い男性の老人だけを指すのではなく、人の好い老人一般を指す言葉のようであるが、永瀬清子はこの好々爺になることを拒否しているわけで、そのところがやはり偉いと思われる。たとえば、詩「圭」(「卑弥呼よ卑弥呼」所収)では、最初の行で「わが圭はとれたか」と問い掛け、「大かたはなめらかになりはしたが／なおむやみに心のいらだつ日があるのは何故？」として、次のように展開されている。

それは大体相手には意味のわからぬ事について。

つまり相手が世間並みによしとしている時

世間並みと、おのずから光るほんとはちがうと

私は言いたいのだ。

このあと詩は、そのように言う「私」に対して「そこがお前の至

らぬ所と、人々は嗤う。」が、しかし何も分かっていないのはあなただちの方だということを言い、キリストも最後に「主よ 彼等を赦したまえ その為すところを知らざればなり」と言ったではないか、「ずいぶんえらそうなんだ」けれども、自分も「人々」に「そのように」言いたいということを語っている。

日本では年を取ると丸くならなければならないように思われているところがあるが、しかしこれは詰まらない（趣味）と言えそうである。実際これは単なる（趣味）ではないかと思われる。不正や、間違ったこと、どうも首を傾げざるを得ないことなど、様々な事に面したときは、年齢は関係なく、是々非々で行くべきであろう。たとえそれでまさに「圭」^{かど}が立ったとしても、おかしいと思つたら、そのことをはっきりと言うべきである。むしろそういうときこそ、老人は毅然とした姿勢を示して、若い世代に対して範を垂れるべきだと思われる。永瀬清子は、そう言っているのである。

これらのことは、永瀬清子にとっては、若かったときと変わらず、明日に向かって生きていこうとすることであつた。『あけがたくる人よ』に収録された「お茶の水」と題された詩では、おそらく「白水社」の編集者と思われる男性と、戦後直後のお茶の水のひじり橋のたもとで待ち合わせたことが語られ、「なつかしい人、いまはなく／ひじり橋の夕陽の中に立っているのは私一人。」とされている。これは過ぎ去つた往事を振り返り、「川水はゆき年月は流れ」とされて、詩人は時の流れを感じながら無常感さえ覚えていなくもないのだが、しかし、最後に二行に至って永瀬清子らしい力強い言葉が語られている。すなわち、「なべてのものまばたきの間に過ぎゆくか／ただ眼にみえぬ明日のみを求め求めて」と。たしか

に過去を懐かしんでいるのであるが、そこに止まらず、「明日のみを求め求めて」いるのである。過去ではなく、あくまで「明日のみ」なのだ。しかも、「求め求めて」と強く希求するのである。

おそらく、こういう姿勢は、永瀬清子にある、また彼女自身十分に自覚している「欠乏」の思いに繋がっていると考えられる。おそらく「欠乏」という言葉は、彼女の詩のキーワードの一つと言えるのではないかと考えられる。若いときの第一詩集である『グレンデルの母親』（前掲）に収められた詩「黒犬と私」では、「犬が私の心の欠乏を嗅ぎつけると思ふ」と語られ、「私は日も夜もひもじいが／私の欠乏は正しい」と語られている。これは厳密には、「私の欠乏」が正しいというよりも、「欠乏」と感じる私の感性、思いが正しいと言いたいのであろうが、「欠乏」の感覚は永瀬清子の中で続いていて、『彩りの雲 短章集4』の中には「欠乏」と題された短章があり、「欠乏」を持つている人は物事の本質を早く見ぬく」と語られている。

あるいは、「欠乏」という言葉ではなく、『蝶のめいてい 短章集1』（思潮社、一九七七（昭和五二））に収められている短章「トラックが来て私を轢いた時」では、「トラックが来て私を轢いた時、私の口からは「餓えた魂」がとび出す」と語られている。ここでは「欠乏」ではなく「餓えた魂」という言葉が遣われているのであるが、意味はほぼ同じと言つていいであろう。自分の魂は「欠乏」して「餓え」ているのだ、と言っているわけである。それが永瀬清子に詩を書かせてきたわけで、その意味で「欠乏」は彼女にとって大切なものである。

もっとも、そうであるにしても、興味深いのは、「欠乏」とは別

のもう一つの人生もあつたかも知れないという思いも、最晩年の永瀬清子にはあつたことである。「卑弥呼よ卑弥呼」(前掲)に収められた詩「恋は氷山」では、その最終連でこう語られている。

もつと楽しい一生ならよかつたのに。

とうとうもう一生も終るから云いますがね、

おそろしい運命的な氷山の近づき

それはただ「欽乏」というもののかたまりよ、

いくら銀色に立派にかがやいていても。

たしかに、心の中の「欠乏」を基底に据えて詩を書いてきた永瀬清子であつたが、そういう「欠乏」の無い、別の一生もあつたかも知れないし、その「楽しい一生」を空想したくなる気持もわかるであろう。それと同様の、ひよつとしたらあつたかも知れないが結局は無かつた出来事を語つたのが、ちよつと話題にもなつたらしい、詩集『あけがたにくる人よ』の表題目になつた詩「あけがたにくる人よ」である。この詩は、第一連の最初で「あけがたにくる人よ」と呼びかけ、「私はいま老いてしまつて／ほかの年よりと同じに／若かつた日のことを千万遍恋うている」と語り、第二連で若かつた「その時私は家出しようとして／小さなバスケット一つをさげて／足は宙にふるえていた／どこへいくとも自分でわからず／恋している自分の心だけがたよりで／若さ、それは苦しさだつた」と続く。

だが、第三連で「その時あなたは来てくれなかつた」と語られ、最終の第四連でこう語られている。「もう過ぎてしまつた／いま来てもつぐなえぬ／一生は過ぎてしまつたのに／あけがたくる人よ／ててっぽつぽうの声のする方から／私の方へしずかにしずかにくる人よ／足音もなくて何しにくる人よ／涙流させにだけくる人よ」

と。先の「恋は氷山」と同じく、実際には無かつたけれど、あり得たかも知れない別の人生を思いながら、詩は書かれている。自分のこれまでの人生を基本的には肯定し、したがって老いた今のあり方も受け容れてはいるのであるが、あり得たかも知れない別の可能性を思うということも、老年にはあつていいことであろう。永瀬清子にも、そういう思いをするときがあつたということである。

なお、藤原菜穂子の『永瀬清子とともに』『星座の娘』から「あけがたにくる人よ」まで(思潮社、二〇一一(平成二三・六)によれば、「あけがたにくる人よ」という恋の詩の相手について直接に永瀬清子に問うたところ、「そんな人はいませんよ、これまで出会つた人たち……複数の人をひとつにして作り出したのですよ」と永瀬清子は答えたようである。おそろく、永瀬清子と淡い恋の交流がなくはなかつた、純夫と正雄の二人の従兄たちも、その「複数の人」の中に入っているであろう。

「恋は氷山」や「あけがたにくる人よ」で語られたような、実際には無かつたもう一つの人生の可能性を、年を取つてから想像するというのは、しかも「あけがたにくる人よ」のように恋心を語るといふのは、永瀬清子が(自分は老年だから恋心とは無縁だ)といふふうには思っていないかつたということである。永瀬清子は空想の中で胸をときめかせているのである。それは(老年だから)(年寄りだから)という、言わば自己限定意識を持っていなかつたということである。おそろく、このことが大切なことだと思われる。(高齢者だから)といふふうには自分を限定したときから、その人にとつて「老い」は始まるようである。

三

自分の「老い」を肯定的に受け止め、しかしその「老い」に自足したり、あるいは甘えたりすることなく、若かったときと変わらずに、これまで通り常に前を向いて「明日のみを求め求めて」（「お茶の水」）生活すること、それは「欠乏」を満たそうとすることでもあるが、ときには自分の「老い」をユーモラスに捉え返すだけの精神の余裕も持つこと、変に丸くなったりすることなく、「圭」のあつる人と世間から思われたとしても、おかしいと思つたらそれを声に出すこと——これらのことが永瀬清子における、言わば「老い」を生きる指針であつたと言える。まとめて言うならば、自らの「老い」を素直に受け止めつつも、これまで通りに前を向いて生きていくことである。おそらく、その姿勢の根底にはあの「欠乏」の意識があつたのであろう。満たされない思いである。

永瀬清子はそのように「老い」を生きてきたと思われるが、そういう「老い」が可能になつたのは、彼女の人生に対する積極的な姿勢があつたからである。それとともに彼女には自らに課した、詩を書くという仕事があつたからでもあつた。次に『短章集』から、詩についての永瀬清子の思いや考え方を幾つか引用してみたい。

『流れる雲 短章集2』——「詩を書くのは今を破るため、／詩を離れられないのは新しい自分の意味を探すため。」（糸巻きのはじめを）、「なぜ五十年も詩を書くのか、ときく。／一番主な理由は「自分に満足していないから。」（「なぜ」）、詩は（略）最後に至って新しい価値がみつかつていなくなつたらなんにもならぬ。」（詩

とは）。「焔に薪を 短章集3」——「今まで詩じゃなかったものがだんだん加わらなくて／本当の天才にはなれないのだ。」（「焔に薪を」）、「見えていてもはつきりしなかつたこと、その本当の意味をくつきりとさせるのが詩である。」（「本当の意味」（一））。因みに「本当の意味」（四）には、「はつきりさせるということ、すべての保守や伝統はきらう。」とあり、永瀬清子の社会的政治的な姿勢を知ることができる。『彩りの雲 短章集4』——「命をよびますのが詩であつても／そのあり方は多様である、複雑でもある。」（「わが目標」）、「つまり判らないから書く。そして新しい道にやつと出逢う。」（「夏草が」）、とある。

また、必ずしも詩に限定してはいるのではないが、「老い」の問題にも関わることを述べているのが、以下の文である。『わたしの戒老録』（共同通信社、一九八四（昭和五九）・九）に収録された「いたいことが残っているの」から、「炎がよく燃えるためには薪を新しく投げ入れねばならない。伝統や自分の考えのみ固執し動けぬ人は早く老いるのだと思う。」と。また「あかしあ」一〇三号（一九八五（昭和六〇）・六）掲載の「進みゆく人（前）」からでは、この間社会保険会社で「いきがい」をテーマに話したことだと断つて、「生きているということは少しでも進むことである。（略）生きている限りは少しでも、新しいことを考えたり行動したりして進んでゆく、ということが生きている一つの甲斐である」としている。

「進みゆく人（後）」（「あかしあ」一〇四号（一九八五・八））では、「あんまり口幅つたいことを言うようでおかしいけれども、人がいかに汲み取ってくれるか、いかに訳に立ってくれるか、そういうことが、私は詩を書くことの一つの大きな仕事ではないかといつも思つてい

る訳なんです」と。第十二回地球賞の「受賞のことば」では、「(略)もうじき本当のメ切のくる迄、なお刻々の心を書いていきたいものです」(「地球」第九一号、一九八七(昭和六二)・一二)と語っている。さらに、永瀬清子追悼号となった「黄薔薇」一四三号(一九九五(平成七)・七)には永瀬清子の「かえりみて」という短いエッセイが掲載されている。これは一九九四年九月三日に書かれたものようである。

そして老婆には老婆の詩があつて、それを私は、わが登山の途中にあつても書きつづけ、やがてもう絶対にペンをとれぬ日が来た時、

「ここまで書いてくれたのか」と人々がにっこりしてくれること。「元気だして自分たちもあととはつぐよ」と云つてくれること。

それは詩の道は遠いから、限りなくつづく筈だから——。

それを願っていたのだ。

この言葉は遺言のようにも読め、おそらく永瀬清子自身もそう思う思いもあつたのではないかと推察されるが、しかし、「老婆には老婆の詩があつて」「わが登山の途中にあつても書きつづけ」と語っているわけであるから、まさに「ペンのとれぬ日」まで、「限りなくつづく」「詩の道」を歩み続ける決意を語つた言葉と言えよう。ここで「登山」というのは、自らの長い人生を比喻して語っているわけである。

このように、「老い」を素直に受け止めつつ、しかし「老い」だからと言つてことさらにそのことを意識せず、若いときから始めた詩の仕事の前を向いて進めていき、その中で「新しいこと」を取り入れたりする——そのような「老い」てからの永瀬清子のあり方は、実は

「老い」の問題をどう考えるべきか、ということ論じている心理学者や医者などの意見に、多くが共通していることに驚かされる。

ここでは触れなかったが、病気に罹ったときのこと、あるいは健康のことをどう考えるべきかという問題がある。永瀬清子も一時高血圧になったことがあつたようである。「いたわれ」と「いたわり」——精神と肉体はいつも密着している——(「国民生活」、一九八二(昭和五七)・九)によると、「元気な私も一時血圧が二三〇にも昇つていたこと」があつたようで、「勤め先の診療室の先生から安静にとやわれ」たのであるが、永瀬清子は勤務——岡山県庁の世界連邦事務局の仕事だと思われる——を続け、また百姓仕事もそのまま継続したのである。とくに夫の百姓仕事ぶりが見ていられず、永瀬清子も「どんどん手伝いました」とある。ところが、翌日には血圧は「ふしぎにもかえつて下がつていたので」、「慣れた仕事を快くやることは血圧にも悪くないのだと知り」、「それから三年ほどの間に、決して勤務をやめずに次第に血圧を下げることに成功しました」と述べている。

このことは、あの九〇歳を超えても現役の医者であつた日野原重明が『豊かに老いを生きる』(春秋社、一九九五(平成七)・一〇)で述べていることに、そのまま当てはまる。日野原氏はこう述べている、「絶対安静という状態が一番悪いのです。(略)病気は働きながら治すものです」と。まさに永瀬清子は、働きながら治したわけである。また同書で日野原氏は「私たちはもつと早くから老いを受容して、老いの中にどう生きればよいかということをよく考える」べきだということを述べているが、「心辺と身辺(続)」(「黄薔薇」一二三号、一九八九(平成元)・五)で永瀬清子は、「老令という病気だけはなおらない」と語りつつも、雑誌発行の仕事も若いときの

ように進まないから、却って「忙しい」と述べた後、「でもそれが自然とあきらめ「老令」を敵とせず、わが友と思う」と語っている。これはまさに「老いを受容して」いることであろう。

この「受容」に関しては、ポール・トゥニエが『老いの意味 麗しい老年のために』（山村嘉巳訳、ヨルダン社、一九七五（昭和五〇）・六）で、「老いを受け入れることはたやすいことではありませぬ」としながらも、老いを受容することの大切さを語り、「むしろ、受容ということばほど積極的なものはないのです。なぜなら、受け入れるということは、^{ワイ}諾ということなのですから」と述べている。そして、やはりこう語っている。「過去にとらわれた老人は、新しい未来を作り出す自由な心はもてないのです」（略）大切なことは、勇気を失わず、いつも過去ではなく未来に眼を向け、計画をいくつもたてて行くことなのです」と。

因みに、このようなあり得べき老いとは逆の場合も、同書では語られている。それを永瀬清子と真反対のケースとして、次に見ておきたい。「そして、もつとも抜にくい、もつとも不幸な老人とは、病気や老年や死も含んで、世界や人生をあるがままに受け入れることができず、自己放棄も知り得ず、矛盾を耐え忍ぶことができず、ただ嘆き悲しみ、人を責めるのみで、かざられた、弱い、ただ他人にたよるしかない自分ありのままに受け入れることのできない老人のことではないでしょうか」と語られているのである。ここで言われている「自己放棄」というのは、職業的事柄や現世的な役割から「自分自身を解放」していることである。この「不幸な老人」は過去の地位などの思い出をいつまでも引きずっているために、自分の老いを受け入れることができないわけだ。

もちろん、これまで見てきたように、老いを受け入れるということは、老け込むことではない。老いを素直に受け入れて、且つそれまでと変わらず、明日や未来に向かって日々を活動的に生きていくことである。ポール・トゥニエは同書でそういう老年を「美わしき老年」と呼び、こう語っている。「美わしき老年とは、世界に心を開き、人間に注意を怠らない豊かな老年のことなのです。すみ切つてはいるが、はげしさも失わぬ老年、戦いつづける、しかも情熱的に戦いつづける、たしかに青春とはちがってもやっぱり戦う老年なのです」と。ここで語られていることは、まさに永瀬清子の老いに当てはまる。

たとえば、先ほど引用した「いたわれ」と「いたわり」（略）の中で永瀬清子は、「（略）結局私はまだ自分を老人と思うひまがないのです」と語っているが、やはりこれは永瀬清子が「戦う老年」を生きていたということであろう。そして、老人の問題に関しては、現代では「いたわれる」事のみが取り上げられているが、「（略）逆に老人の本当の幸福はむしろ「いたわり」が発揮できるところにあるのを忘れていきます」と述べている。こういうことが言えるのも、永瀬清子が「世界に心を開き、人間に注意を怠らない豊かな老年」の人生を生きていたからであろう。

もちろん、これらのことは永瀬清子が老いてから初めて彼女の生活に現れたのではなく、以前からそうだったと言うべきであろう。このことに関してシモーヌ・ド・ボーヴォワールも『老い』上・下（朝吹三吉訳、人文書院、一九七二（昭和四七）・六）の中で、「（略）彼は老化による変質を受けながらもかつてそうであった個人でありつづける、つまり彼の晩年は大部分彼の壮年期によって左右されるのだ」と述べている。同じ趣旨のことを突き放した言い方で言っ

いるのが、小説家のW・サムセツト・モームである。「要約すると」という短いエッセイで、「愚者の老年は愚かであろう、しかし、若い時も愚かだったのである」（中村能三訳、『老いの生き方』（鶴見俊輔編、筑摩書房、一九八八・八（昭和六三）・八）所収）と述べている。これを逆に言えば、賢い老年は若いときも賢かったということになるが、永瀬清子を見ると、まさにそうだったと言えよう。

また、老年になっても永瀬清子は人生や生活に対しての瑞々しい感性を持っていたようであるが、これもずっと以前よりそうだったのであろう。たとえば、『彩りの雲 短章集4』所収の「人間力学」の中の短章「e 私の持っているものうち」では、「一方、人生に慣れていないこと、それが私の一番恵まれた素質なので、いつもすべては今じまるのであり、毎朝はじめて目がさめるのである」と、長い間思い思いついて来た」と語られている。『彩りの雲（略）』は七八歳の刊行であるが、こういうことを老年になって言えるというところが、老いてもそれ以前の感性が続いていたということである。〈老いたのだから、年寄りらしくしよう〉などと、微塵も思っていないなかったということもある。永瀬清子の人生、それは老年の人生もだが、〈日々を新しく生きる〉人生だったということである。

そして、永瀬清子の弱者や敗者に眼を向ける姿勢は、たとえばグレンデルとその母親に眼を向ける姿勢や、また短章「鮮明化する値打」（『焔に薪を 短章集3』所収）で語られている、「貧の立場、餓えの立場、老の立場を忘れたくない。それは鮮明に物を見る眼鏡だからだ」という言葉によく現れている。その姿勢は若いときから老年に至るまで変わりはないのである。そのこと一つとっても、永瀬清子は一貫している。ついでに言えば、その立場は、アメリカ空

母エンタプライズが佐世保港に入港したとき、当時のいわゆる三派系全学連が阻止闘争を展開したことに触れて、短章「核装備の」（『蝶のめいてい 短章集1』所収）で「核装備のエンタプライズに立ち向かうのに角材と石ころ。そのことが象徴的なのだ。あまりにも桁がちがっている。／「暴力」が悪いなら大きな暴力の方がよりせめられるべきだ。」と語っていることに通じる。こう語った永瀬清子に私は大いに共感する。

さて、このように見てくると、永瀬清子の老いの生き方というのがわかってきたのではないかと思われる。老いを正面から受け止め、自らの老いを受け入れつつも、ことさら老いを強調することなく、それ以前と同じように未来に眼を向けて前向きに生きていくのが、永瀬清子の老いの姿であった。だから、決して自らの老いを否定しているのではないが、先にも引用したように、「（略）結局私はまだ自分を老人と思うひまがないのです」というように、活動的な生活を送っていたということである。如何にも隠居じみた暮らしなどしていないということである。目の前の仕事に懸命に携わっていたわけである。

おそらく、老年になつてのこのような生活こそが、老いた人を生かす生かさせ、結果的には長生きさせるのではないかと思われる。哲学者として有名な西田幾多郎の旧制高校時代からの友人であり、禅仏教の学者としては世界的と言えぬ鈴木大拙は、九六歳の長命であつたが（一九六六（昭和四一）年没）、仏教学者の中村了権の『老い』を生かす親鸞の智慧（春秋社、二〇一六（平成二八）・八）によると、鈴木大拙が九〇歳くらいとき、長寿の秘訣を教えてほしいと尋ねられると、彼は次のように語ったそうである。「わしは、べつに長生きしようとして、なつたのではないな。もし、そこになにかある

とすればだ、目の前にやりたいことがあって、しょっちゅう、それに気がひかれていると長生きするのではないかな」と。

また、中村了權の同書によると、秘書だった岡村美穂子氏も鈴木大拙について、こう回想しているようである。すなわち、「いつもひたむきに、その日その日を堪忍・精進しながら、つねに前方を見詰めて進んでいく。過ぎ去ったできごとは、自然に忘れ去っていく。あるのは今日から未来へということだ。いつも未来を考え、真実に未来に生きようとするお方であった」と。

鈴木大拙の言葉も永瀬清子が言いそうな言葉であるが、それよりも岡村美穂子氏の言葉の方が、まるで永瀬清子のことを言っているかのようである。やはり、過去を振り返るのではなく、常に前方、未来を見詰めながら進んでいくことである。まさに永瀬清子はそうして生きてきた。長寿であった最晩年になるまでそのように見事に生ききったと言えるであろう。

〔付記〕

本稿は、二〇一八年九月一日に赤磐市の「くまやまふれあいセンター」で行った講演を論文にまとめたものである。同センターにある永瀬清子展示室の職員で永瀬清子研究家でもある白根直子氏にはたいへんお世話になった。お礼申し上げます。なお、引用文献等については、注記の形を採らず、本文中に明記した。

(あやめ ひろはる 〓 本学文学部日本語日本文学科)